文部省著作教科書

中等國語

二

文部省

（4）

東京高等師範附属中學校
圖書之印
昭和 年 月 日受入
T.A.
東京帝國大學文學部國語學教室

教科書文庫
50574
5
810
45-1948
013 04
498 42

中等國語 二

文部省

(4)

中央図書館

広島大学図書
0130449842

目錄

一　南船北馬……一
二　詩　五首……四
三　李白と杜甫……八
四　小話四題……十三
五　神話と傳說……二十
六　詩　五首……二十四
七　桃花源の記……二十七
八　たゆまざる努力……三十
九　秋風五丈原……三十三
十　孔子と子路……四十一
十一　孔子とそのことば……四十六

一　南船北馬

漢民族みずからが、古くから呼びならわして來た、南船北馬ということばは、中華民國の風土を最もよく言い表わしていて、他のいかなることばにもかえがたいひゞきを持つ。こうした風土にはぐくまれつゝ、かれらはどのように自然を見、どのように生活を続けて來たのであろうか。

中華民國の地図を開いてまず目につくのは、東西に横たわる二つの大きな川である。一つは四川盆地を経て中央の大平原を静かに流れる揚子江（長江）であり、他の一つは山岳地帶を一氣にくだり、北方の大平原をうるおして、やがて海に注いでいる黄河である。江と河と、表わす文字も読む音も異なるように、この二大河の流域にはそれ〴〵著しい特徴がある。

揚子江の流域は、五風十雨の温暖な氣候と沖積層の土質とに恵まれて、農産物はきわめて豊富である。また川や湖や沼が多く、住民はおのずから船によって往來する。

黄河の流域は、寒暑の差がはなはだしい大陸的氣候で、比較的雨量も少ない。舟運の便もたいしてないので、おもにろばやうまが交通に利用される。この地方の土質の特徴である黄土層を溶かして流

れる黄河は、いつも濁っていて、あてのないことのたとえを「河清をまつ。」[1]とさえいうくらいである。

この二つの大河の流域はいずれも農業を主要産業としているが、黄河流域の石炭、揚子江流域の鉄など、天然資源にも乏しくない。両流域の自然がそれ〳〵特色を持つように、住民の性格もそれ〳〵異なっている。

唐の詩人が「千里うぐひすないて緑紅に映ず。」[2]と歌った揚子江流域ののんびりしたながめは、やさしい女性的自然美に満ち、この中に住む人々に自然へのあこがれを感じさせ、自然ととけあおうという考えを起させる。それが天産に富み、やゝゆとりを持つ日常生活とあい伴なって、理想的、情熱的、詩的な住民の性格となって現われて來る。これに対して黄河の上流地方は、かの、「天は蒼々、野は茫々、風吹き草たれて、牛羊を見る。」[3]という詩の句が示すように、壮大な男性的大自然というほかにあてはまることばはなかろう。かゝる大自然は、人の力ではどうすることもできないから、たゞこれに順應し、そのもとにおいて、ひたすら自己の生活に努力しようとする。こゝに現実的、理知的、散文的な住民の性格が育てられた。

このように南北それ〳〵異なってはいるが、総じて中華民國を特色づけるものはあの大自然であろう。したがってそこに育つ人々はいずれも大自然とのつながりを感じ、空間の無限と時間の永遠とに調和する心持と、そしてそれを表現することばとを持っているのである。「燕山雪花大いさむしろのごとし。」[4]とか、「白髪三千丈。」[5]とかいう表現は、單なる誇張ではない。果てしもなくひろがる燕山にむしろのように大きな雪片が降りしきる全体の状況の調和や、慰めきれない老いのうれいにこみあげる人間の世界をこえた無限の心情が、少しのいつわりもなく表わされているにすぎない。ことばや文字は單に事象を傳達する道具ではなく、人間の精神の象徴なのである。

のどかな船のろの音が聞かれる江南には浪漫優雅な文藝が生まれ、勇ましくうまのいなゝく華北では質実剛健な思想が築かれた。かゝる環境に育った民族が、西洋文化と並ぶ東洋文化の源流を創造したのである。

千里[6] うぐひす ないて 緑 紅に 映ず
水村 山郭 酒旗の 風
南朝 四百八十寺
多少の 楼台 煙雨の 中

白日[8] 山に よつて 盡き
黄河 海に 入りて 流る
千里の 目を きはめんと 欲し
更に のぼる 一層の 楼

注

(1) 古い詩の文句。
(2) 杜牧の「江南春」の第一句。
(3) 北朝の無名氏の「勅勒歌」の後半。
(4) 李白の「北風行」の第四句。燕山は今の河北省附近をさす。
(5) 李白の「秋浦歌」の第一句。
(6) 唐の末の詩人杜牧の「江南春」の詩。酒旗とは酒屋の目じるしの吹き流しの小旗、煙雨はかすみやもやなどの立ちこめた水蒸氣をいう。
(7) 多いことと少ないこと、多いこと、いくらかなどの意味があるが、こゝでは多いこと。
(8) 唐の中ごろの詩人王之渙の「登鸛鵲楼」の詩。楼は蒲州城（今の山西省永済縣）上にあった。
○ 千里鶯啼綠映紅。　水村山郭酒旗風。　南朝四百八十寺。　多少楼台煙雨中。
○ 白日依山盡。　黄河入海流。　欲窮千里目。　更上一層楼。

二　詩　五首

詩は本來見たこと感じたことを調子のよいことばに表わし、節づけて歌ったものである。漢詩はほゞ一定の字数から成る句を規則的に並べて情意を表現したもので、きわめてよく音調を整えてある。

こゝに出したのは、唐代作家の傑作五首を書きくだしたもので、前課をうけ、主として風光を写した作中、特に春・夏の詩を示した。

春　曉

春眠　曉を　覚えず
処々　啼鳥を　聞く
夜來　風雨の　声
花　落つる　こと　知る　多少

（孟浩然）(1)

黄鶴楼に孟浩然が廣陵にゆくを送る(2)(3)

故人(4)　西の　かた　黄鶴楼を　辞し
煙花(5)　三月　揚州に　くだる
孤帆の　遠影　碧空に　盡き
たゞ　見る　長江の　天際に　流るるを

（李白）(6)

辺　詞

五原の春色旧来遅し
二月垂楊いまだ糸を掛けず
(8)即今河畔氷開くの日
まさにこれ長安花落つるの時

(9)張敬忠

絶(10)　句

両箇の黄鸝(11)翠柳に鳴き
一行の白鷺青天にのぼる
窓には含む西嶺(12)千秋の雪
門には泊す東呉万里の船

(14)杜甫

山亭の夏日

緑樹陰こまやかにして夏日長し
楼台影をさかしまにして池塘に入る
水晶の簾動いて微風起る
一架の薔薇(13)満院香し

(10)高駢

注

(1) 唐の中ごろの詩人、名は浩、浩然は字。
(2) 湖北省武昌縣の西の台上にあった楼の名。
(3) 今の江蘇省江都縣（揚州）。
(4) むかしなじみ、こゝでは詩人孟浩然をさす。
(5) 春がすみの立ちこめた春の景色。
(6) 唐の中ごろの詩人、第三課参照。
(7) 今、綏遠省に同名の縣がある。漢の五原郡の地で、黄河の北岸に近い。おそらくこのあたりをさすのであろう。寧夏省の綏遠境にも五原があり、一説には陝西省長安郊外の五原としているが、それでは長安城内とあまり氣候の差はあるまい。
(8) 黄河の氷がとけたので、長安ではもう花も散ってしまったろうにと、都を思い出す意。
(9) 唐の中ごろの詩人。
(10) 杜甫が唐の代宗の廣德二年の春、成都（四川省）の草堂に帰った時作った五七言絶句十首のうちの一つ。
(11) 黄鳥即ちうぐいすの一種。
(12) 西山の白雪は年中消えない。西嶺は西山、また雪嶺。四川省成都に近い華陽縣の西にある。

(13) 東のかた、遠い蘇州あたりからのぼって來た舟。
(14) 唐の中ごろの詩人。第三課參照。
(15) 架はたな。
(16) 唐の末の詩人。字は千里。

○ 春眠不レ覺レ曉。処々聞二啼鳥一。夜來風雨声。花落知多少。
○ 故人西辞二黄鶴楼一。煙花三月下二揚州一。孤帆遠影碧空盡。惟見長江天際流。
○ 五原春色旧來遅。二月垂楊未レ掛レ糸。即今河畔氷開日。正是長安花落時。
○ 両箇黄鸝鳴二翠柳一。一行白鷺上二青天一。窓含西嶺千秋雪。門泊東吳万里船。
○ 綠樹陰濃夏日長。楼台倒レ影入二池塘一。水晶簾動微風起。一架薔薇満院香。

三　李白と杜甫

前課を受け、唐の二大詩人李白と杜甫とについてその性行と作風とをしのびたいと思う。

唐代は、支那文学の花ともいうべき詩の咲きにおった時代であるが、そこにとりわけ美しく咲き誇った花は李白と杜甫との詩であろう。

この二大詩人は、ともに唐の中ごろ、ほゞ時代を同じゅうして生まれた。李白は蜀の人、家はもと蜀の青蓮郷にあったので青蓮と号し、母が太白星を夢みて生んだから、(1)字を太白といったのだという。年少の時から擊劍を学び、長じて志氣雄豪、任侠をもってみずから許し、諸國を歴遊して、交わるところは多く不遇の士と隠逸の人々とであり、樂しむところは山水の遊びと詩酒の会とであった。天宝のはじめ長安に遊んで先輩賀知章に才を認められ、その推挙によって玄宗に仕える身となったが、もとより豪放のかれは、日々長安市中の酒店に沈醉して、時に天子から召されても容易に應ぜず、冷水を面上にそゝがれてはじめて正氣にかえって筆を執るというありさまであった。しかし、かくて作り出した詩は人を驚かす絶妙の作であった。杜甫の詩に、「李白一斗詩百篇、長安市上酒家に眠る。天子呼び來たれども船にのぼらず。みづから称す、臣はこれ酒中の仙。」とあるが、これは、かれのこの磊落な一面を言い表わしたものである。天子からは才能を愛されたが、その性格が周囲にいれられず、ついに都を去って四方に放浪することとなった。これからのかれは酒と詩とを友として大いにその天才を発揮し、天宝の乱後に一時官途にもついたが、まもなく事に坐して左遷の身となり、不遇に終った。晩年のかれは心を山水にほしいまゝにし、あるいは一日にして千里、あるいは終年にして一寓、たゞ意のおもむくまゝに旅を続け、ついにその生涯を閉じたのである。傳えるところでは舟中に醉うて水中の月を捕らえようとし、誤っておぼれ死んだともいう。

かれは実に天才詩人であった。その八百首に近い詩はいずれもいわゆる天馬空を行くがごとく、拘束されるところのないものである。そしてかれの生涯が任侠の一青年に始まって、脱俗の詩仙として終るまで変化が多かったために、その詩もきわめて多彩である。みずから青山にすんで桃花流水を樂

しみ、月下に独酌して明月をむかえようとするかれに、白髪三千丈の愁を嘆じ、兵を談じ、遊俠を語り、辺城の苦を述べ、慨世の情盛んなる一面がある。これはあながち年齢に伴なう思想の変化とのみは見られない。むしろ詩人たるかれの性格に一見矛盾と思われる多面的のものがあり、ためにその作風をして多種多様ならしめた。そしてその得意としたものは古体の詩であったが、近体でも五七言絶句にいたっては唐代三百年の第一人と評せられる。かの、「頭をあげて山月を望み、頭をたれて故郷を思ふ。」といい、「相看てふたつながらいとはざるは、たゞ敬亭山あるのみ。」と詠ずる諸篇のごときは、眼前の景を神化の筆に託して、余韻の盡きぬものがある。

このように錬磨を用いぬ天才はだの李白に対し、語、人を驚かさずんば死すともやまざるの苦心と精力とを傾けて、あい並んで詩壇の双星となったものは、杜甫である。両者の性行はあい似ぬのに、その交情はきわめて親密で、互に相憶の詩を交換し、双星の光芒はかつてあい犯すことのないのみか、詩聖は互に詩聖をもって知己としたもののごとくである。

杜甫は字を子美といい、少陵と号した。家貧しく少時は人に寄食して過ごし、二十四歳で進士の試に應じたが及第しなかった。かれはこの前後に呉・越・齊・趙の間に遊び、山水の氣に接して大いにその詩想を養い、やがて玄宗の知遇を得たが、安祿山の乱にあって、賊手に捕らえられ、空しく君を思い、家を思っては、「國破れて山河あり、城春にして草木深し。」と嘆じ、花にも涙をそゝぎ、鳥にも心を驚かす悲しみを重ねること一年、ついにのがれて粛宗に謁し、右拾遺の官を拜したのであったが、かれもまた李白と同様に、罪を得て流される身となった。時に兵乱あい次ぎ、親戚離散して、家は窮苦を極め、兒女は餓死をも免れないほどであったという。かれは官を棄てて秦州の地に客となったが、困窮の極、短衣脛をおゝわず、手足凍裂し、日に薪を負い、とちの実を拾ってみずから給するというありさまで、「藥を採ってわれまさに老いんとす。童兒にはいまだ聞かしめず。」と悲しんだのを見ると、一代の詩聖にして、いかにその生活に苦しんだかは想像に余りがある。かくて蜀に入り、劍南に流落すること数年、後には草堂を成都の西に営み、江をまくらにし、酒をほしいまゝにして吟詠にふける機会も恵まれ、節度使嚴武の保護を受け、役人にもなったが、その死後は再び放浪の旅に出で、大暦五年の秋、江陵から衡州にくだる途中の水難がもとで、その不遇の一生を旅寓に終った。その作中、「衰年肺を病んでたゞ高枕。」とあるのによれば、肺をわずらっていたことは明らかで、その病苦はいっそうかれをして悲観的の詩人たらしめたことと思われる。

詩人としてのかれの一生を見ると、天宝の乱以前の少壯時代は、かれもまた豪俠を好み、功名にあこがれたもののごとく、その縱横の詩才はつとに当時に発していた。乱後、蜀に入るまでの苦難時代はわずかに五年にすぎぬが、この間にかれはあらゆる困苦を味わって、社会と人生とに対し、深い理解と同情とを持つにいたった。当時の作たる一百四十余首は、ことゝ〳〵く戰爭の悲惨を述べ、生活の痛苦を吟じ悲壯を極めている。その後、成都に客となった約十年は、かれの生活もほゞ安定をえ、不遇の老詩人もこゝにいたって静かに人生を顧みることができたのであろう。その作風も円熟の域に達している。それだけ氣魄の雄を失ったうらみはあるが、しかし常に家國を忘れず、社会の内情を歌った沈痛の詩風は、かれの一生を通じて失われない。

思うに杜甫は情の人であり、多涙の詩人である。この点は李白が詩仙といわれ、樂天的なのと反している。李白を南國的とみれば、杜甫は北方風で、実際的である。いつも時事に熱中した社には、春

花も秋月も、君を思い、國をいたむよすがにほかならなかったが、李には、俗塵を脱し、自然に放吟する詩が多い。試みに、「(13)朱門に酒肉臭く、路に凍死の骨あり。」の句に対して、「(14)人生の得意すべからく歡を盡くすべし。金樽をして空しく月に対せしむるなかれ。」の句を誦すると、思い半ばにすぎるものがあろう。長篇に得意なのは杜甫、短篇に天授の才を発したのは李白、李は自由に表現して作爲を事とせず、しかも疾風急雨のごときおもむきがある。杜の詩は経驗と学問とから出て、錬磨の功を積み脈絡の通った作が多い。二家の性格作風はこのように異なる。けれども、古今にならびない詩聖として、唐を詩の黄金時代たらしめた点においては両者の地位あい等しといわねばならぬ。

注

(1) 実名のほかにつける名。尊敬して人をよぶときは字をいう。
(2) 「飲中八仙歌」。
(3) 「山中問答」の詩がある。
(4) 「月下独酌」の詩がある。
(5) 「秋浦歌」の詩がある。
(6) 「靜夜思」の詩の句。第六課参照。
(7) 「独坐三敬亭山」の詩の句。
(8) 官吏登用試驗に合格した者の称。
(9) 「春望」の詩の句。巻三第九課参照。
(10) 「秦州雜詩」の句。
(11) 一地方の軍政や行政事務をすべおさめた官職。
(12) 「返照」の詩の句。
(13) 「自レ京赴二奉先縣一詠懐五百字」の中の句。
(14) 「將レ進レ酒」の詩の句。

四小話四題

昔の支那にはたくさんのおもしろい傳説がある。この小話四題は、坂井德三編訳「支那イソップ物語」の中から選んだもので、興味や教訓があるばかりでなく、支那古代の生活や社会や民族性などを知るのにも参考となるものが多い。

(1)○宋の國に、家を離れて学問していた者がありました。三年たって家に帰って來ると、いきなりその母親の名を呼びすてにしましたので、母親は、それをたしなめて言いました。

「おまえは、三年も勉強して來ていながら、どうして、わたしの名を呼びすてにするのですか。」

すると、その子が答えました。

「おかあさん、この世界では、大昔の聖天子といわれる堯や舜より以上の賢人はありません。しかしその名も、私どもは呼びすてにしております。また天地より以上の偉大なものはありません。

それも私どもは呼びすてにしております。ね、そうでしょう。おかあさん、あなただって堯や舜ほどの賢さはありません。また天地ほどの大きさもありません。ですから、私がおかあさんの名を呼びすてにしたって、別におかしくはないはずなのです。」

母親は言いました。

「いゝえ。わたしはね、おまえが学んだことをみな実行するつもりならば、さっそく礼儀通り親の名を呼びすてにしないようにしてもらいたいと思います。それからまた反対に、学んだことをすぐ全部は実行しないというつもりならば、私の名を呼びすてにすることだけは、あとまわしにしてもらいたいと思います。」

（戰國策）[2]

○太形山・王屋山という二つの山は、四方七百里もあり、高さは数万丈もある、大きな高い山です。これは、もとは冀[3]州の南、河[4]陽の北にあったものです。

年は九十に近い北山の愚公という人がありました。自分の家のまむかいにこの山があって、どうも出入りに不便でしかたがありません。困ったあげく、家族のものを集めて、相談して、こう申しました。

「どうだろうなあ、わしは一つ、みんなと力を合わせ、山のけわしいところを平らにして、こゝからすぐ、豫[5]の南を通り、漢[6]の北にも行けるようにしたら、なか〳〵いいだろうと思うんだが、みんな、どう思うかな。」

これを聞くと、みんなは「それはいい考えだ。」と言って賛成しましたが、愚公の妻だけは、とてもだめだろうと思って、申しました。

「ちょっと待ってください。あなたの力では、ちょっとした小さい丘をくずすこともできないんですよ。それなのに、太形山・王屋山の二つの山を、どうして平らにできるものですか。一体、取った土や石はどこへやるつもりなのですか。」

「それは」と、みなが言いました。「渤[ぼつ]海湾のすみに棄てればいいだろう。」

こういうようなわけで、子や孫を引きつれて、愚公は仕事を始めることになりました。三人の者が、土を運び、石を割り、それを渤海湾のすみにもっこで捨てに行ったのでありました。

愚公の家の隣の家にやもめがいて、子供がひとりありました。この子はやっと歯がぬけかわったばかりの小さな子でありましたが、それでも喜び勇んで、この仕事を手傳いました。この子は土をもっこでかついで捨てに行く仕事をしておりましたが、なにしろ、こんなふうに小さい子なので、冬に出かけて、捨てて帰って來ると、また次の年の冬が來ているというようなぐあいでした。

河曲というところに、ちえの智叟[ちそう]という人がありました。この人がこの話を聞いて笑って、それをとめて言いますのに、

「なんというばかなことなんだろう。年をとって、もうあの世に行きそうなからだをしていて、山のかけらだってこわすことはできないだろうよ。あれだけの土や石を、どうするつもりなんだ。」

すると、ばかの愚公は長いため息をついて言いました。

「なんというがんこなわからずやなんだろう。ものわかりのわるい人だ。まるで、女子供にも及

ばない。だって、私が死んでも子がいるし、子は孫を生み、その孫にはまた子ができる。そしてその子にまた子供ができ、その子供にはまた孫が生まれる。こうして、子から孫、孫から子へと、引きついで仕事をして行けば、仕事は絶えるということはない。それで、山が、この上大きくなるのでない以上は、どうして、平らにしてしまうことができないわけがあろうか。」

河曲のちえの智叟は、こう言われると、ぐっとつまって、なんとも返事ができませんでした。すると、山や海の神様がこのことを聞いて、そんな様子では、とても山を動かす仕事をやめそうにもないと思って、その話を天の神様に申しあげました。すると天の神様は、愚公たちのその眞心に感心なさって、力の強い二人の神様に命じて、この二つの山を背負って、一つを朔東(7)に、また一つを雍南(8)にお置かせになりました。ですから、それから後というものは、冀州の南、漢の北の地方は、平野(9)ばかりで、小さな丘一つありません。

（列子）

○齊(10)の晏子が、楚の國に來ることになりました。楚の王様がこれをお聞きになって、おそばの者どもにおっしゃいました。

「今度、齊の國から使に來る晏子という者は、齊の國でも一番口のたっしゃな者だ。來たら、ぜひ一つ恥をかゝせてやろうと思うが、何かいいくふうはないものだろうか。」

すると、おそばの者が言いました。

「では、その者がまいりました時に、私がひとりの男をしばりつけて、わざと王様の前を通り過ぎることにいたしますから、王様は、その男は何者かとお尋ねください。私は、これは齊の國の者です。とお答えいたしましょう。で、次に王様は、その男は何をしたのだとお聞きください。私は、この齊の男はどろぼうしたのですと答えましょう。こうすれば、恥をかゝせてやることができるでありましょう。」

「それはよい思いつきだ。」

と、王様はおっしゃいました。

やがて、齊の國の使の晏子が來ました。楚の王様は、酒を出して、いろ〳〵とごちそうをされました。その酒盛のさいちゅう、二人の役人が、ひとりの男をしばって、王様の所へやって來ました。

「そのしばってある男は何者なのだ。」

と、楚の王様がお尋ねになりました。

「齊の國の者で、どろぼうでございます。」

すると王様は、晏子の顔を見つめながらおっしゃいました。

「なるほど、齊の國の者はもと〳〵どろぼうがうまいのですかなあ。」

晏子はそれを聞くと、席を立って、うや〳〵しく、王様に申しあげました。

「みかんの木は、淮河(11)という河の南の方に生えている時には、その実はおいしいみかんとなりますが、淮河の北に植えかえられると、その実はまずいからたちになってしまうということでございますね。どっちにしても、葉はそう変わらないけれども、実がすっかり変わるんだそうでございます。なぜでしょうか。ほかでもありません。氣候や風土が違うからでございます。これと同じように、今、齊の國にいれば、少しもどろぼうなどしない人民が、お國の楚に來れば、どろぼ

うするというのは、これは、お國の氣候や風土が悪くて、善い人民をも悪い人間にしてしまうのではございませんか。」

（晏子春秋）[12]

○梁[13]の國と楚の國との境に番小屋があって、どちらもたくさんうりを植えておりました。梁の番小屋の人々は、ほねをおってたび〳〵うりに水をやりましたので、うりがよくできていました。ところが、楚の番小屋の人々は、怠け者で、めったにうりに水をやりませんので、悪いうりしかできませんでした。楚の國の縣知事は、梁の小屋のうりのできがよいのに、自分の小屋のうりのできがわるいので、小屋の人々をしかりつけました。しかられると、楚の小屋の人々は、梁の小屋のうりが自分たちのよりよくできているのに腹が立って、夜の間に、こっそりと梁の畑にしのびこんで、そこのうりをさん〳〵荒らして來ました。うりの中には、枯れるものもたくさん出て來ました。

梁の小屋の方でもこれに氣づいて、自分の方の役人に向かって、

「向こうであんなことをするんだから、こっちでもこっそりと出かけて行って、うり畑を荒らして仕返しをして來てやろう。」

と言いました。役人はそれを聞くと、縣知事の束就という人のところへ、相談に行きました。すると、その人は言いました。

「それはいかんなあ。お互にうらみの種をまくだけのことじゃないか。人が悪いことをしたからといって、こちらも悪いことをするのじゃ、しょうがない。それは、ぜひこうすることだな。毎晩、必ず人をやって、こっそりと楚の畑のうりに、水をたっぷりとかけて來てやるんだね。見つかっちゃだめだよ。」

そこで梁の小屋からは、毎晩、こっそりと、楚の小屋のうりに水をやりに行きました。楚の小屋では、朝、畑のうりを見まわってみると、みなたっぷりと水がやってあって、うりは日に〳〵よくなって來ました。これはおかしいと思って、楚の小屋の人々が物かげから見ていると、意外にも梁の小屋の人々がしていることでした。

楚の縣知事はこれを聞いて、すっかり喜んで、この話を王様にお傳えしました。王様はこれを聞いて、非常に恥ずかしく思われました。

（新序）[14]

注

(1) 春秋時代の十二列國の一つ。
(2) 戰國時代の政治家の言動を記した書物の名。
(3) 今の河北省。
(4) 今の河南省。
(5) 今の河南省。
(6) 今の湖北省。
(7) 朔方郡（今の綏遠の南境）の東方をさす。
(8) 雍州（今の陝西・甘肅方面）の南方をさす。
(9) 戰國時代の一思想家である列子の学説をしるした書物の名。
(10) 齊・楚は春秋戰國時代の大國の名。一つは今の山東省の地を、一つは揚子江の流域を領していた。

(11) 河南省に出て、安徽・江蘇の二省を過ぎて海に注ぐ川。一名淮水。
(12) 春秋時代の齊の國の政治家、晏嬰のことを書いた書物。
(13) 戰國時代の魏の國。魏は都を大梁（今の河南省開封縣）に移してから梁と呼んだ。
(14) 漢の劉向の著。古今の逸話を集めたもの。

五　神話と傳說

昔原始人は、天地万物の現象が人の力ではどうにもならぬのを見て、種々の說をたててこれを解釋した。その解釋のしかたが、今日でいう神話である。神話が発展すると、その中心となるものが、次第に人間に近いものとなる。こうした敍述が今でいう傳說である。支那の神話や傳說には、わが國で廣く語り傳えられているものが少なくないが、こゝでは松村武雄著「支那神話傳說集」の中から、その二、三のものを選んでみた。

○太陽の中には、からすがいるといわれ、またにわとりがいるともいわれる。からすは火烏と呼ばれ、にわとりは金鷄と呼ばれる。太陽にこもっている陽の精氣が凝り集まってなったものである。だから火烏も金鷄もみな足が三本生えている。陽の氣はその數が奇數であるからである。

太陽は車に乘って一日に一回、東から西へと空をかける。車には六頭の龍が結びつけられている。そして羲和という者が、それらの龍を御して太陽の車を走らせるのであった。太陽はこうして、朝暘谷を出るが、夕方虞泉に近づくと世界がうす暗くなり、更に蒙谷にはいってしまうと全く夜となる。晝と夜とはこうして生ずるのであった。

○月の中には一匹のうさぎがすんでいる。これをたまうさぎという。夜になって、月が大空に照り出すと、一生けんめいになって藥をつく。世の中の人々に幸福をくだすのは、このたまうさぎのわざであると信ぜられる。

たまうさぎは、夜じゅうあまり精を出して藥をついているので、晝になると一度に疲れが出て、こっくりこっくりと眠ってばかりいる。そして日が暮れかゝるころになると、そろ〳〵起き出して、また藥をつきはじめるのであった。

○昔、大きな洪水が起って、天下の民が非常に苦しんだ。天帝はそれを見かねて、多くのものを集めて相談をした末、みんなの說をいれて、鯀というものにいいつけて、洪水を治めさせることにした。

鯀は大地にみなぎりあふれている水を、どうにかしてひかせようと、一生けんめいにほねをおった。しかし、かれは心ががんこで、人々のいうことをきかなかったので、九年の間働いても、洪水を治めることができなかった。あるいは、とびやかめのいうことをきいて、水をひかせようと努めたが、すっかり失敗してしまったともいわれる。

時の帝の堯はこれを見て、鯀の罪を責めて、罰としてかれを羽山に追い放った。かれは羽山にあじきない月日を送っていたが、三年たってもその罪をゆるされなかったので、とう〳〵、

「こうなっては生きているかいがない。」

と、黄能[4]に姿を変えて、羽淵という深淵に沈んでしまった。一說には、帝が祝融にいいつけて、羽郊という所で鯀を殺させたといい、また他の一說では、鯀は羽淵に身をなげると、玄魚となって、ひげを揚げ、うろこを振って、波の上を泳ぎまわっていた。人々はそれを見ると、

「あれは河の精だ。うっかりすると、ひどいわざわいを受けるぞ。」

と驚き恐れたという。

後の人は羽山に廟を立てて、春夏秋冬に鯀を祭ることにした。

堯の帝のあとを継いだ舜という帝は、鯀の子の禹に命じて、洪水を治めさせたが、禹は巧みに山を開き河を通じて、洪水をひかせることにした。その間の苦心は一通りでなく、大かめや龍が現われて、禹をその背に載せては、あちらこちらと運んでくれた。こうして禹は、とう〳〵首尾よく洪水を治めることができたのであった。

○支那[5]から西南に当たる遠い所に、夜郎縣という地があった。

昔そこに住んでいたひとりのおとめが、河にはいって着物を洗いすゝいでいた。すると節の三つついた一本の竹が河上から流れて來て、おとめの足の間にからまった。おとめはそのまゝにしてなおも着物を洗っていると、にわかに足のあたりで子供の泣き声がした。

「あら、おかしいわ。どこに子供がいるのかしら。」

おとめはこう言いながら、竹を取りあげた。泣き声はどうも竹の中から聞えてくるらしい。おとめは驚き怪しんで、竹を割ってみた。すると、その中にかわいらしい小さな男の子がはいっていた。

「まあ、かわいい子だこと。」

と、おとめはそれを抱きあげて、いそ〳〵と自分の家に帰って、たいせつに育てあげることにした。

竹から生まれた男の子はすこやかに生い立った。大きくなるにつれて、ちえが衆にすぐれ、武勇もなみ〳〵ではなかった。かれはとう〳〵夜郎縣の主となった。そして竹の中から生まれたというので、竹をおのれの姓とした。漢の武帝が、元鼎六年に、支那の西南に住んでいるえびすどもを征伐した。時に、その武帝の軍勢はあちらこちらを切り從えて、とう〳〵うしおのように夜郎縣に攻め入って來た。夜郎縣の主の竹王は、

「すさまじいいきおいだな。天子の軍勢にはむかっても、とうてい勝つ見こみはない。」

と思って、武帝の軍勢を出迎えて降参をすることにした。武帝はその志をよみして、

「夜郎縣は、そのまゝそなたが治めていくがよい。」

と言って玉印綬[6]を授けた。

竹王が死ぬと、土地の人々は、

「あのかたは、人間から生まれたのではない。不思議なかただ。」

と言って、みんなで一つの廟をこしらえて祭ることにした。今日夜郎縣に竹王神というのがあるのは、卽ちこれである。

注

(1) 太陽説話。

(2) ギリシア神話でも、太陽神ヘリオスが数頭の駿馬に引かせた車に乗って、一日に一回、東から西へ空を渡るという。

(3) 洪水説話は、バビロン・ギリシア・ヘブライ等にもあるが、それらは人類の悪事を憎んでこれを懲らすということが主となっているのに対して、支那のそれはこゝに見るように、主として洪水を治める治水説話となっている。

(4) 三足のかめ。

(5) この話は早くから日本に知られていて、竹取物語の原拠または類似物語として考えられている。

(6) 玉材で作った天子の印とそれにつけたひも。王に封ずるときのしるし。

六詩　五首

第二課を受けて、唐人の作中、主として秋・冬の詩を出したが、景を写すとともに情を敘していると ころを注意して誦すべきである。

山行

遠く寒山(1)に　のぼれば　石径　斜なり
白雲　生ずる　処　人家　有り
車を　停めて　そゞろに　愛す　楓林の　晩
霜葉は　二月の　花よりも　紅なり

（杜牧）

秋思

洛陽(2)城裏　秋風を　見る
帰書を　作らんと　欲すれば　意　万重
また　恐る　匆々　説きて　盡くさざるを
行人　発するに　臨みて　また　封を　開く

（張籍(3)）

静夜の思

牀前　月光を　看る
疑ふらくは　これ　地上の　霜か　と
頭を　あげて　山月を　望み

頭を たれて 故郷を 思ふ　（李白）

董大に別る[4]

十里の 黄雲 白日 くもる
北風 かりを 吹いて 雪 紛々
愁ふるなかれ 前路の 知己 なき ことを
天下 たれ人か 君を 識らざらん　（高適[5]）

汪倫に贈る[6]

李白 舟に 乗つて まさに 行かんと 欲す
たちまち 聞く 岸上 踏歌[7]の 声
桃花潭水 深さ 千尺
及ばず 汪倫 われを 送るの 情に　（李白）

注

(1) 秋から冬にかけてのもの寂しい山の形容。
(2) 今、隴海線の沿線にある河南省の首都。
(3) 唐の中ごろの詩人。字は文昌という。
(4) 唐の樂工董庭蘭のことだろうといわれる。
(5) 字は達夫、唐の中ごろの詩人。
(6) 桃花潭（安徽省涇縣の西南にある）の村人。李白のために美酒をふるまうのを常とした。その恩を多とした李白が別れに際してこの詩を作って倫に贈ったものである。
(7) 足で地をふみならして調子をとり歌うこと。

○ 遠上寒山石径斜。白雲生処有人家。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。
○ 洛陽城裏見秋風。欲作帰書万重。復恐匆々説不盡。行人臨発又開封。
○ 牀前看月光。疑是地上霜。挙頭望山月。低頭思故郷。
○ 十里黄雲白日燻。北風吹雁雪紛々。莫愁前路無知己。天下誰人不識君。
○ 李白乗舟将欲行。忽聞岸上踏歌声。桃花潭水深千尺。不及汪倫送我情。

七　桃花源の記

湖南省常徳という地名を武陵桃源と呼べば、なごやかな心がわくのはなぜであろうか。それは、(1)陶淵明の「桃花源の記」の、あの不思議な魅力が私たちの心の中に、桃の花の林に包

まれた別天地に対するあこがれを植えつけてしまったからである。桃の花の咲きかおる別天地は、また平和な楽園でもあった。乱れはてた世の中に生きて、平和な楽園を夢みるのは、すべての人のならわしであろうが、わけても桃花源という美しい地名が、あこがれをそゝるのである。歴史の本にも記されず、地理の書にも載せられず、うき世を離れて暮らして來た桃花源の住民ののんびりした生活が、私たちのとげ〳〵しい感覚をやわらげてくれるのである。

晋の太元年中のこと、武陵にひとりの漁夫がありましたが、ある日のこと谷川について小舟を進めて行くうちに、いつのまにか來た路もわからぬ奥へ分け入り、ふと桃花の林にさしかゝりました。岸をさしはさんで数百歩の間、ほかの木は一本もなく、眞紅[2]の花の色はあざやかに美しく、落花がひらひらと風に舞っておりました。これは不思議と思いながら、漁夫はなおも進んで、その林に分け入りました。林のなくなるところがこの川の源で、そこらに山が一つあります。山にはほら穴があって、うっすりと光がさしています。小舟をおりてその穴へはいりました。はじめのうちはごく狭く、やっと通れるくらいでしたが、数十歩行きますと、急にぱっと明かるく廣くなりました。平らな廣い土地で、しっかりした家屋が立ち並び、田も池も良くできていて、くわや竹が茂っています。田地には路が縦横に走り、にわとりやいぬの鳴き声も方々で聞えます。そこを往來してたち働いている男女のなりふりは、よその土地と同様でありまして、年寄りも子供も、いかにも楽しげな顔つきをしています。漁夫の來たのを見てたいへん驚いて、どうして來たのかと尋ねますので、いち〳〵答えました。

それから漁夫を家へ連れて行き、酒の用意をし、にわとりを殺して、ごちそうしました。こんな男がやって來たと聞いて、村じゅうの人がみんな話を聞きに來ました。そして自分たちのことについては「先祖が秦の乱をさけて、家族や村人を引きつれて、この人里離れた場所へ來てから、そのまゝ外へ出たこともなく、ずっとよその人とはかけはなれていた。」と説明しました。それから「今は一体、何王朝の時代ですか。」と漁夫に尋ねました。これらの人々は、漢代のことも知らないくらいですから、魏だの晋だのという近ごろのことはまるで知らなかったのです。そこで知っていることを残らず話してやりますと、人々は大喜び。ほかの人もめい〳〵漁夫を自分の家によんでは酒肴のもてなしをしました。数日間の滞在ののち帰ることになりましたが、人々は「こゝのことは、いうほどのこともないのだから、人にはだまっていてください。」と漁夫に頼みました。そこをたって自分の舟を見つけ、もと來た路を帰りましたが、その途中、ところどころ目じるしをつけておきました。郡城につくと、今までのことをくわしく太守[3]様に申しあげたので、太守様はすぐさま人をつかわして、漁夫と同道させました。前につけておいた目じるしをたよりに行きましたが、迷いこんでしまって、二度と路が見つかりませんでした。南陽[4]の劉子驥という人は志の高い人物でしたので、このことを聞いて、喜び勇んで出かける計画をしましたが、果たさぬうちに病氣でなくなりました。それ以來、小舟を浮かべて桃花源へ向かう者はありません。

（小田嶽夫・武田泰淳「揚子江風土記」による）

注

(1) 晋末の大詩人。名は潜、淵明はその字。一説に名が淵明。高潔な人で、地方官を在任数十日で辞し、詩酒

を友として余生を樂しんだ。

(2) 俗本の原文の「芳草鮮美」は「芳華鮮美」が正しいので、訳文を改めた。

(3) 太守は一郡の長官のこと。

(4) 地名。今、河南省の西南部から湖北省の北部に及ぶ地。

八　たゆまざる努力

人と人とがつきあいをするのにも、お互の性格をよくわきまえなくてはならないように、國際的な交際でもまた、相手方の風俗習慣や民族性を十分に理解することが必要である。中華民國人は元來どのような点に特性が見出だされるか。こゝでは、一西洋人の中國人観によって、隣邦中華民國の民族性の一端をうかゞおうと思う。

中國人は一見したところ鈍重のように見える。現在やっている仕事がごくつまらない仕事であっても、全身の神経をそれに奪われるようだ。毎日何回となくやっている事でも一生けんめいに注意をそれに集中して、余事は耳にも目にも入れまいと努力する。

この注意集中力に加えるのにしんぼう強さをもってするのだから、大小となくいろ〳〵の場合について、てこでも動かぬがんこさが示される。他の國民にもひたすら一本道をつきすゝむものは少なくない。けれども、中國人ぐらいその一本道が長く、かつまっすぐなものはない。心を急に轉換することができないので、中國人はいったんこうと自分で思いきめたことは、どこまでも押し通して行く。旧帝政時代には、すべて役人はむずかしい國家試驗に及第しなければ登用されないことになっていたので、富と地位を欲する若い好学の士は、この試驗に及第することを最大の目標としていた。その試驗はきわめて嚴格であり、かつ競争者が多いので、地方試驗から順次最高試驗まで通過する者はごく少数で、大多数の者はその目的を達しないうちに白髪の老人になってしまう。外國人は、七十歳にもなって、なおかつ、こういう野心と目的を捨てないでいる老学究を見て、驚きの目を見はるけれども、中國人はいっこう平氣である。それは、いったん学問で身を立てようと決心した者は、死ぬまでそれに精進するのはあたりまえだと考えられているからだ。

こういう堅忍不拔のしんぼう強い性質は、学問ばかりでなく、他のすべての方面にも現われているので、中國人は目的がすぐに達せられないからといって決してやきもきしない。何年も先の將來にわたって計画をたてることは、だれでもそんなにむずかしくはないが、その計画をあくまでも追及して行くには特別の素質がいる。中國人はこの性格において比類のない特長を持っている。果実が熟するまでには数年、数十年、あるいは数百年もかゝるような計画に、中國人は非常な熱心さをもって打ちこむ。中國人が時間を苦にしないという点こそ、たいていの外國人ならいいかげんあきらめてしまうようなことでも、最後までがんばらせる力となるのである。

揚子江下流のデルタ地方は、かつて海底にあり、干潮の時わずかに頭を出す程度であったが、潮が

寄せては引くたびに砂泥を残して行き、ついには底が水面に盛りあがって蘆が生い茂るようになった。そうなると同時に、中國人はさっそく自然力に協力して、そこへ耕地を開拓しはじめたのである。運河を掘ってその土を盛りあげ、満潮の際にも水面上にあって、田畑が耕されうるようにした。ある場合は運河をつくることによって交通の便を図るとともに、その掘った土で埋立地を拡大するという遠大な計画まで行った。そして、いったん運河ができてからは、その河底の肥えたどろを始終さらっては耕地の肥料とした。こうして後から後からつけ加えた土で、水面からいっそう高く〳〵と、耕地を盛りあげたのである。

これがいつごろから始まったかはだれにもわからないが、紀元前六百年の孔子時代にはすでに相当進んでいたことは確かなようで、最初の着手はおそらくそれより数千年以前にさかのぼるものであろう。ところが、今日中華民國を旅行して見た人なら、だれでもこの仕事が今なお継続されていることに氣づくだろう。百姓たちは、クリークや運河のどろを注意深くさらって田畑に敷き、これを肥料として利用するばかりでなく、また土地を高める手段としている。そんなことをしても一年間に高められる高さは目に見えぬくらいで、全く知れたものだが、しかし何千年となくこれを継続して來た結果、かつて満潮時には水面下にかくれた何百マイル平方にわたる土地が、今では完全に水面上五フィートから六フィートの高さに達している。これだけの仕事がひとりひとりの百姓の手で、一回にバケツ一ぱいぐらいずつのどろを積みあげることによって達成されたことを考えるとき、他のいかなる人間の大事業もまことに微々たる小事のように思われて來る。

(Carl Crow: "My Friends, the Chinese." 関浩輔の訳による)

九　秋風五丈原[1]

長い支那の歴史の中で、最も有能な將軍として、政治家として、更にそれよりも高潔な人格者として、後世の親愛と尊敬の的になっている人は諸葛孔明であろう。

果てもない戰乱の世に生まれた孔明は、南陽の片いなかにひきこもり、風月を友として静かな生活を樂しんでいたが、その英才を見拔いた劉備（後に蜀漢を建て、その天子となった人）の、心からの頼みをことわりかねて、ついにこれに仕えた。即ち一身の安らかな生活をすてて、天下万民の平和を実現しようという大きな悲願を立てたのである。

しかし、孔明の才能は世に並びなくすぐれてはいたが、蜀漢の國力はあまりにも小さかったので、その悲願がまだ成就しないうちに、身は遠征の陣中で病死しなければならなかった。この苦難に終始した二十余年間を、たゞ誠実一筋に貫ぬき通した孔明の一生は、後世の人に深い感銘を與えずにはおかない。

この一篇は、先帝劉備の死後、幼主を助けて内治に外征に心身を労しきった丞相孔明が、五丈原で名將司馬仲達の率いる魏の大軍と対陣中、ついに燈火の燃えつきるように死んでいった前後の物語である。われ〳〵はこの物語の中から、孔明のすぐれた人格知謀に感ず

るとともに、近代とはおよそかけ違った、当時の占星術・運命観等に注意することを要する。

(2)蜀漢の國では、劉備がなくなると、太子の劉禪が位をつぎ、諸葛孔明は、これを助けて、國内のことを、何くれとなく、みな取りさばきました。そのころ南方の蛮夷がそむいて、しきりに國境を侵すので、孔明はみずから兵をひきいてこれを征伐し、蛮王の孟獲という者を七たび捕らえて七たび放ちやり、とう〳〵心から帰服させました。こうして國内の憂いをなくしておいてから、いよ〳〵先帝以來の宿望である中原を回復しようと、北のかた漢中へ討って出ました。

出発にさいして天子にさしあげたのが有名な出師の表であります。孔明はその中で次のように言っています。

「私は、もと一介の野人(3)でございます。乱世をさけて南陽(4)ですきくわを手に安らかな日を送っておりましたが、先帝はもったいなくも三度まで、私の草屋へおいでなされて、天下のことを御相談なさいました。それで私も感激して、先帝の御ために、一身を投げ出して働こうと決心いたしたのでございます。それからこのかた二十余年、先帝とごいっしょにいろ〳〵と苦労をいたしてまいりました。先帝は私の誠実さをお見こみなされ、崩御に当たって、あとの大事をおまかせになりました。それからというものは、たゞその信頼にそむかぬようにと、ひたすら心をいためてまいりました。今や南夷の平定も終り、軍備食糧も十分に整いました。まさに王師をひきいて北のかた中原を定めるべき時であります。願わくは、微力を盡くして賊をうち拂い、天下を平定して

(5)もとの都に移りたいと存じます。これが、私の、先帝に報い、陛下におつくしするみちだと存じます。陛下、私は今おそばを離れて遠い戰場に出発いたします。深い御恩を思い出しまして、あふれる涙をとめることができません。」

世に「(6)水魚の交わり」といわれる劉備と孔明の心情がせつないまでによく表わされているではありませんか。こうして孔明は、進んで(7)祁山を攻め、着々勝利を收めてゆきましたが、たま〳〵將軍の馬謖が、孔明のさしずにそむいて、たいせつな街亭(8)の戰いに大敗したため、この遠征は失敗に終りました。この馬謖はかねてから孔明が深く信愛していた將軍でありましたが、軍のおきては破られないと、孔明は涙をふるってこれをきり、みずから丞相(9)の職を退いて、その責任を明らかにしました。

その後も、孔明はたび〳〵北征しましたが、いつも糧食が続かず、軍を返さねばなりませんでしたので、いろ〳〵考えたすえ、屯田の制といって、耕しながら戰うはかりごとをたてて、こゝにまたも祁山へ出ました。

このころ、魏の大將は司馬仲達(10)といって、これもなか〳〵名將でしたが、とても孔明の相手ではありません。四十万の大軍をひきいて渭水に陣をとりましたが、出て戰えば負けるので、たゞ、とりでを固くして守るばかりでした。

ある日、孔明が山の上から見ていますと、魏の軍勢が三千、五千と、渭水の陣を出ます。孔明は部下の大將に、もし敵が攻めて來たら、軍勢を分けて、渭水の南の敵陣を奪いとれといいつけ、備えを立てて待っていました。やがて魏の大軍は、ときの声をあげて攻めかゝって來ましたが、またもや、孔明の計略にかゝって、さん〳〵に敗れ、ようやく渭水の北へ引きあげました。

そこで、仲達は全軍にふれを出して、「渭南のとりではすでに失った。諸將にして再び戰いを言う者はきる。」と言い、堅く陣門を守っていました。

孔明は陣を五丈原へ移して、しきりにいくさをいどみますが、仲達がどうしても應じませんので、女のかぶり物と着物とに、一通の手紙を添えて、仲達の陣へ贈りました。仲達が開いてみますと、

「あなたは魏の大將となって、大軍を引きつれて來ながら、戰おうともせず、とりでの中にちゞこまって、まるで女と変わりがない。それでこゝに、女のかぶり物と衣服をさしあげる。どうしても戰う勇氣がないのなら、あたまをさげてこれをお受けなさい。もしまた恥を知る心がいくらかでも残っているのなら、男らしい御返事がいたゞきたい。いつでもお相手になろう。」

という、てきびしいことが書いてありました。仲達は笑って、

「孔明がわたしを女だというのか。よし〳〵。」

と言ってこれを受け取りました。そして使者を呼んで厚く待遇し、いろ〳〵の話のうちに孔明の寢食のことを尋ねました。使者は、

「丞相は夜の明けきらないうちから起きて仕事にいそがしく、杖(つえ)二十以上の刑にまでみなお立ち会いなさいます。そうしてお食事は、わずか日に一合たらずです。」

と答えました。仲達はしきりにうなずいていましたが、使者を帰してから、諸將に向かって、

「食事がすゝまず、そんなこまかい事にまで氣をつかうようでは、おそらく孔明のいのちは長くはもつまい。」

と言いました。一方、使者が帰って、復命しますと、孔明は、「仲達は深くわれを知る。」と言って嘆息しました。このころから、孔明は次第にからだの衰えが目だってきました。孔明はかねて吳と打ち合わせて、自分が祁山へ討って出ると同時に、吳からも大軍を出して、魏を攻めるように約束していましたが、はかりごとがもれて、吳はかえって魏に破られました。それを聞いて、さすがの孔明も氣を落しました。そうしてその夜血を吐いて、にわかに病が重くなりました。孔明はかねて自分のいのちがもう長くないのを知って、息のあるうちに魏を滅ぼし、劉備の恩に報いたいと、このたびは万全の策をとってかゝったのでしたが、かように吳がもろくも敗れて軍を返したと聞いて、天命の帰するところを悟りました。その夜、人にたすけられて天文を見ましたが、大いに驚いてとばりへはいり、姜維(きょうい)という大將を呼んで、

「私のいのちはもう迫っている。」

と言いました。姜維は驚いて、

「丞相はどうしてそんなまわしいことをおっしゃるのです。」

と言いますと、孔明は、

「いま三台の星を見るに、客星がます〳〵輝いて、主星の光がうすれ、少しその色が変わっている。それでわたしのいのちが迫っているのを知った。」

と言いました。すると姜維は泣いて、

「昔から祈っていのちを延べる術があります。丞相はその術を御存じのはずです。なぜお祈りなされませぬ。」

と言いました。孔明も今は祈ってもかいがないとは思いましたが、姜維の泣いての勧めに、願いをし

りぞけるに忍びなかったのでした。

「それではおまえは、四十九人の兵士に黒い旗を持たせて、このとばりのまわりを守らせ、まま
え自身は黒い衣服をきて、入口を守ってくれ。わたしは中で北斗星を祭って壽命を祈ろう。もし
七日の間、中央の燈が消えなければ、また十二年のいのちを延べることができるのだ。」

と言いますと、姜維はさっそくその用意にかゝりました。この夜、銀河は晴れわたった五丈原の廣い
空に横たわり、露は重くおりて、陣々に立ちつらねた旗も動かず、さびしく靜かな秋の夜でした。姜
維が四十九人の兵士と外を護りますと、孔明は中で香をたき、花をさゝげ、大きな燈を中央にしてそ
のまわりに七つの燈を置き、更に四十九の燈をめぐらして、髪をさばいて劍を取り、しきりに祈りの
法を行っていました。

すると仲達もまた、ある夜同じく天文を見て驚き、急に部下の大將を呼んで、

「今、將星が位を失って見えるのは、孔明が重い病にかゝったと思われる。おまえは千騎ばかり
引きつれて、五丈原へ討ってでてみよ。敵がいきおい盛んに應戰したら、孔明の病はさほどでも
ないが、もし驚きさわぐようであったら、孔明はすでに危ういのだ。」

といいつけました。

孔明は、晝は病をおして軍事を処理し、夜はこうして祈りを続けましたが、七日めまで主燈が消え
ず、ことに明らかに見えたので、喜んでいよ〳〵法を行っていました。

するとにわかに陣前にときの声が聞え、ひとりの部將があわたゞしくはいって來て、

「魏の軍勢が押し寄せて來ました。」

と言いましたが、そのいきおいがあまりひどかったので、主燈がぱっと消えてしまいました。孔明は
劍をすてて、

「あゝ、死生はやはり天命だ。」

と思わず床の上へ倒れました。

こうして、孔明は五丈原の陣中でなくなり、蜀軍は、その遺命にしたがって、ひそかに陣をぬいて次
第に引きあげることになりました。さて仲達は、毎夜天文を見ていましたが、ある夜大きな星が赤い
尾を引いて、東北から西南へ流れ、蜀の陣へ落ちようとしてはあがり、落ちようとしてはあがるのを
見、驚き喜んで、「孔明が死んだ。」と、すぐに攻めかけようとしました。しかしまた、あやぶんで、ま
ず蜀の陣をうかゞわせにやりますと、はや、人影もありません。「さては。」と、足ずりしてくやしが
り、まっさきに立って追いかけました。蜀軍はまだ遠く行きません。まもなく追いついて攻めかゝると、突然、あいずののろしがあがって、蜀軍が旗を返してむかって來ました。みると、「漢丞相武鄉侯諸
葛亮(ひょう)」と書いてあります。驚いて目を見はると、紛れもない孔明が車の上に乘り、左右に數十人の大
將がずらりと居並んでいるではありませんか。さあたいへん、また計られたと、魏軍はちり〳〵になっ
て逃げました。仲達は五十里余り逃げてもなおふるえがやまず、そばの者に、「わたしの首はまだつい
ているか。」と、まじめで言ったということです。

このすきに、蜀軍は遠く去ってしまいました。

後に、車の上のは木像であったと聞いて、仲達は、

「生きているうちはうまくやったが、死んだ孔明にはかなわない。」

と負け惜しみを言いました。これが世に「死せる孔明、生ける仲達を走らす。」ということわざのもとであります。

（池田大伍「支那童話集」による）

注

(1) 陝西省郿縣の西南にある地名。
(2) 西暦一世紀の終りごろ、後漢の國が衰えて天下が乱れ、蜀漢・魏・呉の三つの國が互に爭ったので、三國時代という。
(3) 官吏、軍人など直接天子に仕える身分のものを士といい、直接に仕えない農夫・商人などを野人とか民とかいう。
(4) 河南省新野縣の北。城西に臥龍岡の古跡がある。
(5) 後漢の都洛陽をいう。魏に占領されたので、これを取り返すことが後漢の天子の血統をうけた蜀漢の宿願であった。
(6) 劉備があるとき「孔明は、私には魚にとっての水のようなものだ。」と言ったことがある。
(7) 甘粛省西和縣の東北にある山。
(8) 今の甘粛省秦安縣の東北にあたる地名。一説に陝西省城固縣の西。
(9) 天子をたすけて政を行う大臣。
(10) 陝西省にある川の名。
(11) 昔の五刑（笞・杖・徒・流・死）の一つ。杖でむちうつ刑。
(12) 武郷侯は武郷という土地の領主。亮は孔明の名。孔明は字。

十　孔子と子路

孔子と弟子の子路の師弟関係は、孔子の数多い門弟の中でも、最も特色のあるものであった。史記という本には、孔子の弟子の列傳がある。そこに、「子路は生まれつき粗野剛直で、乱暴ずき、平生雄鶏を象どった冠をいたゞき、雄ぶたの皮で剣ざやを飾った長刀をたばさんで、儒者の服装に身を整えた孔子をあざけり顔に、わざと粗暴の言論を吹きかけていたが、孔子は諄々と礼を説き聞かせて、かれを君子の道に導いたので、かれも次第にその徳に化して、ついに儒服をまとい、礼物をさし出して弟子入りをすることになった。」とある。こゝにあげた「孔子と子路」は、これを題材とした創作であるが、この話の中に、孔子の人を感化する力の偉大さと、非を悟って善に移ることの敏なる勇者子路の一面を見るべきである。

魯の卞の人仲由、字は子路という者が、近ごろ賢者のうわさも高い学匠の鄒人孔丘を辱めてくれようものと思い立った。えせ賢者何ほどのことやあらんと頭に雄鶏の冠をつけ、腰にぶたざやの大刀を横たえた異形のいでたちで、いきおい猛に、孔丘が家をさして出かける。かれの大きらいな儒服を身

にまとって、内弟子をあつめ、[3]絃歌講誦の声清らかに行いすましている孔子を、まずおさえようというのである。そう〳〵しくどなりながら、目を怒らしてとびこんで來た青年と、温顔の孔子との間に、問答が始まる。

「なんじ、何をか好む。」

と孔子が聞く。

「われ長劍を好む。」

と青年はこうぜんとして言い放つ。

孔子は思わずにこりとした。青年の声や態度の中に、あまりに稚氣満々たる誇負を見たからである。血色のいい、まゆの太い、目のはっきりした、見るからに精かんそうな青年の顔には、しかし、どこか、愛すべきすなおさがおのずと現われているように思われる。再び孔子が聞く。

「学はすなわちいかん。」

「学、あに、益あらんや。」

もと〳〵これを言うのが目的なのだから、子路はいきおいこんでどなるように答える。学の権威についてとやかく言われては笑ってばかりもいられない。孔子は諄々として学の必要を説きはじめる。人君にして諫臣がなければ正を失い、士にして教友がなければ聽を失う。木も墨なわを受けてはじめて直くなるのではないか。うまにむちが必要なように、人にも、そのわがまゝな性情をためる教育が、どうして必要でなかろうぞ。おさめみがいて、はじめてものは有用の材となるのだ。

後世に残された[4]語録の字面などからはとうてい想像もできない、きわめて説得的な弁舌を、孔子は持っていた。ことばの内容ばかりでなく、そのおだやかな音声・抑揚の中にも、それを語る時のきわめて確信に満ちた態度の中にも、どうしても聽者を説得せずにはおかないものがある。青年の態度からは次第に反抗の色が消えて、ようやく謹聽の様子が見えて來る。「しかし」と、それでも子路はなお逆襲する氣力を失わない。

「[5]南山の竹はためずしておのずから直く、きってこれを用うれば厚い犀の革をも通すと聞いている。して見れば、天性すぐれたる者にとって、なんの学ぶ必要があろうか。」

孔子にとって、こんな幼稚な比喩をうち破るほどたやすいことはない。

「なんじのいうその南山の竹に矢の羽をつけ、やじりをつけてこれをみがいたならば、たゞに犀革を通すのみではあるまいに。」

と孔子に言われた時、愛すべき單純な若者は返すことばに窮した。顔を赤らめ、しばらく孔子の前に突っ立ったまゝ、何か考えている様子だったが、頭をたれて、「謹んで教を受けん。」と降参した。單にことばに窮したためではない。実は、室にはいって孔子の姿を見、その最初の一言を聞いた時、おのれとあまりにも懸絶した相手の大きさに圧倒されていたのである。即日、子路は、師弟の礼をとって孔子の門にはいった。

このような人間を、子路は見たことがない。どんな重いものでも両手であげる勇者をかれは見たことがある。千里の外をも察する知者の話を聞いたことがある。しかし、孔子にあるものは、決してそんな怪物めいた異常さではない。たゞ最も常識的な完成にすぎないのである。知情意のおの〳〵から肉体的な諸能力にいたるまで、実に平凡に、しかし実にのび〳〵と発達したみごとさである。一つ一

つの能力の優劣さが全然目だたないほど、過不及なく均衡のとれた豊かさは、子路にはまったくはじめて見るものであった。この人は苦労人だなと、すぐに子路は感じた。おかしいことに、子路の誇る武藝や腕力においてさえ、孔子の方が上なのである。たゞそれを平生用いないだけのことだ。子路はまずこの点でどぎもを抜かれた。放蕩無頼の徒の生活にも経験があるのではないかと思われるくらい、あらゆる人間への鋭い心理的見通しがある。そういう一面から、また一方、きわめて高く汚れないその理想主義にいたるまでの幅の廣さを考えると、子路は心の底から感服せずにはいられない。とにかくこの人はどこへ持って行っても大丈夫なんだ。潔癖な倫理的な見方からしても大丈夫だし、最も世俗的な意味からいっても大丈夫だ。子路が今までに会った人間のえらさは、どれもみなその利用價値の中にあった。これ〳〵の役に立つから偉いというにすぎない。孔子の場合は全然違う。たゞそこに孔子という人間が存在するというだけで十分なのだ。少なくとも子路にはそう思えた。かれはすっかり心醉してしまった。門にはいってまだ一月ならずして、もはや、この精神的支柱から離れえない自分を感じていた。

後年の孔子の長い放浪の生活を通じて、子路ほどよろこんで從った者はない。それは、孔子の弟子たることによって仕官のみちを求めようとするのでもなく、また、師のかたわらにあっておのれの才徳をみがこうとするのでさえもなかった。死にいたるまで変わらなかった、極端に求めるところのない、純粋な敬愛の情だけが、この男を師のそばに引きとめたのである。かつて長劍を手離せなかったように、子路は今はなんとしてもこの人から離れられなくなっていた。自分よりわずか九歳の年長にすぎないのだが、子路はその年齢の差をほとんど無限に感じていた。孔子は孔子で、この弟子のきわだったならしがたさに驚いている。單に勇を好むとか柔をきらうとかいうならばいくらでも類はあるが、この弟子ほどものの形を軽べつする男も珍しい。窮極は精神に帰するといいながら、礼というものはまず形からはいらなければならないのに、子路という男は、その形からはいって行くという筋道を容易に受けつけないのである。「礼といひ礼といふ。玉帛をいはんや。樂といひ樂といふ。鐘鼓をいはんや。」などと言うと大いに喜んで聞いているが、曲礼の細則を説く段になると、にわかにつまらなそうな顔をする。形式主義への、この本能的忌避とたゝかってこの男に礼樂を教えるのは、孔子にとってもなか〳〵の難事であった。それ以上に、これを習うことが子路にとっての難事業であった。子路がたよるのは孔子という人間の厚みだけである。その厚みが、日常の区々たる細行の集積であるとは、子路には考えられない。本があってはじめて末が生ずるのだとかれは言う。しかし、その本をいかにして養うかについての実際的な考慮が足りないとて、いつも孔子にしかられるのである。かれが孔子に心服するのは一つのこと。かれが孔子の感化を直ちに受けつけたかどうかは、また別のことに属する。

（中島敦「弟子」による）

注

(1) 山東省泗水縣の東にあたる地。
(2) 今の山東省鄒縣にあった地名。
(3) 音樂を奏し、書物を読む声。
(4) 儒者のことばやおこないを門人があつめた書物。元來は僧侶の語をあつめしるした書物をいう。と〳〵では

論語をさす。

(5) 陝西省の南部にある山の名。終南山・周南山又は秦嶺という。

(6) 論語陽貨篇に見える孔子の語。

(7) たちいふるまいについてのこまかい礼儀作法。

十一　孔子とそのことば

一

春秋の世、[1]文学盛んに興りたれども、学問をもつぱらにする者は、多くは列國の史官[2]にして、故事を傳へ、または災祥を說くにすぎざりしが、孔子出でて、[3]唐虞三代の道を述べ、儒教を構成して、後世に遺せり。孔子、名は丘、字は仲尼、周の靈王二十年（西紀前五五二年）、魯に生まれ、十五歲の時學に志し、三十にして學成り、詩書礼樂をもつて弟子を導き、身を修め國を治むるに皆仁恕をもつてもととすべきことを敎へたり。五十余歲の時、魯の司寇[4]となりたれども、說用ひられざるが故に辭し去り、[5]衞・宋・陳・蔡を周遊すること十八年にして、魯に帰り、礼を修め、樂を正し、春秋を筆削し、七十三歲にして沒せり。

孔子の敎へは論語に詳らかなり。論語は、孔子または弟子の語を弟子の門人らの記しおけるを、後儒のあつめて一書となせるものなり。孔子の敎へは、当時は七十子の徒に傳はれるのみにて、世にあまねくは行はれざりしかども、漢より以後は、大いに用ひられ、歷代の帝王、みな孔子を尊んで先師とし、つひに東洋道德の模範となれり。

（那珂通世「東洋小史」による）

二

○子いはく、学んで時にこれを習ふ。また、よろこばしからずや。

○子いはく、弟子、入りてはすなはち孝、出でてはすなはち弟、謹みて信、ひろく衆を愛して仁に親しみ、行つて余力あらばすなはちもつて文を学べ。

○子いはく、学びて思はざればすなはちくらく、思ひて学ばざればすなはちあやふし。

○子いはく、由よ、なんぢにこれ[6]を知るををしへんか。これを知るをこれを知るとなし、知らざるを知らずとなせ。これ知るなり。

○子いはく、士、道に志して惡衣惡食を恥づる者は、いまだともにはかるに足らざるなり。

○子いはく、君子は言に訥なれども、行ひに敏ならんことを欲す。

○子いはく、十室の邑にも、必ず忠信丘のごとき者あらん。丘の学を好めるにはしかざるなり。

○子いはく、疏食をくらひ、水を飲み、ひぢを曲げてこれを枕くらとするも、樂しみまたその中にあり。不義にして富みかつ貴きは、われにおいては浮雲のごとし。

○子いはく、三人行へば必ずわが師あり。その善なる者を択びてこれに従ひ、その不善なる者はこれを改む。

○子いはく、学は及ばざるがごとし。なほこれを失はんことを恐る。

○子いはく、忠信を主とし、おのれにしかざる者を友とするなかれ。過ちてはすなはち改むるにはゞかることなかれ。

○子いはく、君子は人の美を成し、人の惡を成さず。小人はこれに反す。

○子いはく、これをいかんせん、これをいかんせんといはざる者は、われこれをいかんともすることなきのみ。

○子いはく、君子はこれをおのれに求め、小人はこれを人に求む。

○子いはく、われかつて終日食はず、終夜寢ねず、もつて思ふ、益無し。学ぶにはしかざるなり。

注

(1) 学術一般をいう。
(2) 文書をつかさどった官。
(3) 堯・舜と夏・殷・周とをいう。
(4) 刑罰をつかさどる官。
(5) いずれも周代の國名。衞は今の河北省開州以西から河南省の懐慶附近にわたる地にあたる。宋は今の河南省商邱の地をさす。陳は今の河南省開封縣以東安徽省亳縣地方にいたる地をさす。蔡は今の河南省にあ。

た。

(6)「之」字はさすものがない。今、旧訓に従ったが、実はよまなくてよい。

○子曰、学而時習レ之。不二亦説一乎。(学而)

○子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛レ衆而親レ仁、行有二余力一、則以学レ文。(学而)

○子曰、学而不レ思則罔、思而不レ学則殆。(為政)

○子曰、由、誨二女知一之乎。知レ之為レ知レ之、不レ知為レ不レ知。是知也。(為政)

○子曰、士志二於道一、而恥二悪衣悪食一者、未レ足二與議一也。(里仁)

○子曰、君子欲下訥二於言一、而敏中於行上。(里仁)

○子曰、十室之邑、必有二忠信如レ丘者一焉。不レ如二丘之好レ学也。(公冶長)

○子曰、飯二疏食一飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一矣。不義而富且貴、於レ我如二浮雲一。(述而)

○子曰、三人行必有二我師一焉。択二其善者一而従レ之、其不善者而改レ之。(述而)

○子曰、学如レ不レ及。猶恐レ失レ之。(泰伯)

○子曰、主二忠信一。勿レ友二不レ如レ己者一。過則勿レ憚レ改。(子罕)

○子曰、君子成二人之美一、不レ成二人之悪一。小人反レ是。(顔淵)

○子曰、不レ曰二如レ之何、如レ之何一者、吾末二如レ之何一也已矣。(衛霊公)

○子曰、君子求二諸己一、小人求二諸人一。(衛霊公)

○子曰、吾嘗終日不レ食、終夜不レ寢、以思、無レ益。不レ如レ学也。(衛霊公)

中等國語
二
(4)

昭和二十二年六月三十日印刷　同日翻刻印刷
昭和二十二年七月四日発行　同日翻刻発行
昭和二十三年三月四日修正印刷　同日修正翻刻印刷
昭和二十三年三月八日修正発行　同日修正翻刻発行
〔昭和二十三年三月八日　文部省検査済〕

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE Oct. 26, 1948)

著作権所有
著作兼発行者　文部省

翻刻発行者　東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者　阿部眞之助

印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式會社
代表者　大野治輔

発行所　東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

広島大学図書
0130449842